



Title	80年代の公衆衛生 : 新米保健所医師として思うこと
Author(s)	逢坂, 隆子
Citation	大阪公衆衛生. 1980, 43, p. 16-16
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/84034
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

80年代の公衆衛生

—新米保健所医師として思うこと—

大阪府豊中保健所保健予防課長

逢坂隆子

昭和53年に大阪府に就職し、保健所医师生活も早や3年目に入った。「保健所たそがれ論」「危機に頻した保健所」などと言われだしてからもうかなりたつ。つい最近でも、中曽根長官があげた行政改革推進のための整理対象として地方機関の中に何と保健所にかかわるものの多かったことか。(9月23日付朝日新聞)

大阪府の中にも、保健所なんかつぶしてしまえと声高に言っている者のあるとかきく。「もうあと何年たてば倒産させますよ。」とまわりが寄ってたかって決めている企業に就職したような不安といらだちが心の奥の方に生まれてくるのを禁じえない。

現在の日本で、あるいは大阪で、本当に保健所はもう必要なのか。住民にとって役に立たないものなのか。

大阪府にはいわゆる無医地区といわれる地域はなく、バスか電車に10分も乗れば病院か診療所があり、救急医療その他個々にはいろいろな問題もあろうが、高度の医療レベルを誇るスタッフが一応そろっている。

しかし、一方、大阪府をはじめとする都市部住民の健康実態について考えてみると、最も医療機関の数が多く、大病院もそろっている大阪市において、住民の健康水準が非常に悪化していることから明らかなように、医療機関がただ近くに存在しているというだけでは、その恩恵に浴することのできない人々が、都市部において増えてきているという事実を、見逃すわけにはいかない。

このような人々の中には、日常の生活・労働におわれて、自身や家族の健康がむしばま

れていることに気づかず、また少々心身の具合が悪いと感じても休養をとったり、適当な医療を受ける余裕をもたない人々、相談する友人も家族もなくボロボロになって一人で死んでいく人々が多くいる。

ここでは、立派な建築物としての医療機関や公衆衛生行政機関ではなく、まさしく地域に密着した、路地裏をほうように住民生活の中に入りこんだ地域保健医療活動、福祉・労働・住宅行政とも一体となった活動が求められているのではなからうか。そして、これはまさに保健所の活動そのものではないか。

来たるべき80年代の公衆衛生は、このような住民の生活・健康の実態をみすえて、その進むべき方向を国や府レベルで計画していく必要があると同時に、日常住民に接して仕事をしているすべての保健所職員、あらゆる職種の者が、今までもこのようにやってきたからとか、人手がないのでできないとかいう粹を一步こえて、今、住民の健康を守る上で何が必要か、公衆衛生従事者はそのために何をすることが必要か、どのような条件が整えばそれを実現できるのかを真剣に、具体的に提案し、保健所をよみがえらせるための声をあげる必要があるのではないだろうか。

